

幼小接続における幼児と小学生の交流活動の現状と課題

数馬 彩香¹・西館 有沙²・若山 育代²

The Current Status and Related Issues of Exchange Activity between Preschool Children and Primary School Students for Preschool/Primary School Transition

Saika KAZUMA, Arisa NISHIDATE, Ikuyo WAKAYAMA

Abstract

There are many kindergartens and nursery schools that have exchange activities between preschool children and primary school students in order to make a smooth transaction from early childhood education to primary education. However, specific information, such as the number and content of the exchange activities and the reason for not having exchange activities, is not clear. We considered that it is necessary to explore some points for improvement based on the current situation so we conducted a questionnaire survey subjecting public kindergartens and nursery schools in order to make the exchange between children more significant. The number of survey distributed was 189 and 136 were collected (72% collection rate). Eighty nine percent of kindergartens and nursery schools had exchange activities in the year of 2014. The number of activity was 2 to 3 times for more than half of the kindergartens and nursery schools, and about 30% had more than 4 times. The purpose of the activity was not only for interactions, but also utilized the opportunities of school events such as sports day and evacuation training. The most common age of children who have exchange was 5 years old class with 1st and 2nd graders, or 5th and 6th graders. The content of the activity was to have the toddler enjoy playing with the primary school students such as playing tag and hide and seek. However, when it is close to starting school, they had interactions where preschool children can imagine themselves attending primary school. The issues that kindergartens and nursery schools had in the exchange activities between preschool children and primary school students were that they did not have time to discuss, prepare, and review the event with the primary school, and they do not have activities that achieve the goal of the interaction event.

キーワード：幼小接続，幼児と小学生，交流，公立幼稚園，公立保育所

Keywords：Preschool/primary school transition, Preschool children and primary school students, Exchange activity, Public kindergartens and nursery schools

I はじめに

幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議（2010）は、幼児期の教育と児童期の教育が円滑に接続するには、幼児と小学生の交流活動，教員同士の意見交換等の交流，教育課程の編成に関する工夫などが必要であるとしている。これらのことは幼稚園教育要領や保育所保育指針，小学校学習指導要領などにも示されており、

たとえば幼稚園教育要領（2008年告示）には「幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続のため、幼児と児童の交流の機会を設けたり、小学校の教師との意見交換や合同の研究の機会を設けたりするなど、連携を図るようにすること」（第3章2（5））とある。また、小学校学習指導要領（2008年告示）には「小学校間、幼稚園や保育所、中学校及び特別支援学校などとの間の連携や交流を図る」（第1章第4の2（12））と記されている。

文部科学省が実施した幼児教育実態調査（文部科学省，2017）によれば、2015年度の幼児と小学生の交流活動の実施率は幼稚園で77.9%（公立

¹ かほく市立しらゆり保育園

² 富山大学人間発達科学部

96.8%，私立 66.9%），幼保連携型認定こども園で 80.9%（公立 89.5%，私立 78.8%）であった。また，全国保育士会（2010）の調査より，保育所においても，幼児と小学生の交流を小学校で行ったところが 74.1%，保育所で行ったところが 64.8%あった。一方，幼児教育実態調査（文部科学省，2017）より，2015 年度に教員同士の交流を行っていた幼稚園は 69.4%（公立 88.9%，私立 58.1%），教育課程の編成を工夫したという幼稚園は 59.5%（公立 70.8%，私立 52.9%）であり，子ども同士の交流と比べるとその実施率は低い。

幼児と小学生の交流は，その多くが年間指導計画に位置づけられており（松崎・無藤・齋藤・佐久間・長谷川・福田・堀田・師岡，2008），双方の教育（保育）時間の中で行われている。庄司・野田（2009）の調査では，運動会や学芸会といった行事において交流をもつケースや，幼児が小学生の授業を参観したり給食を一緒にとったりするケースが確認されている。このように，交流の機会や方法が複数あるということも，実施率の高さにつながっていると考えられる。ただし，その一方で幼児と小学生の交流を行えていない園があることも事実である。

文部科学省・厚生労働省（2009）は，幼児と小学生が交流する意義として「幼児が小学校生活に親しみ期待を寄せたり，自分の近い将来を見通すことができるようになる」，「小学生が幼児に伝わるような言葉使いやかかわりを工夫したり，思いやりの心を育んだり，自分の成長に気づいたりする」ことを挙げており，幼児と小学生の交流を意義あるものにするためには「継続的に取り組み，交流が深まるようにすることが大切である」と述べている。また，継続的な交流のためには「相互のねらいに対応した指導計画を作成する，教材研究を深めるなど，事前事後の打ち合わせ等を行うことが大切である」，「担当学年だけでなく，全教職員の理解の下に行うことが重要であり，子どもの長期的な発達の見通しや指導について考えることが大切である」としている。

幼小連携については，多くの研究が取り組まれているところであるが，幼児と小学生の交流に焦点をあて，交流がいつ，どのような機会を用いてどの程度行われているのか，ねらいはどのように設定されているか，活動の内容はどのようなものであるか，交流が行われていない要因にはどのようなものがあるかといったことについて調べた研究は少ない。し

かし，子ども同士の交流を意義あるものにするためには，取り組みの詳細を調べ，課題を明らかにしていく作業が不可欠である。

そこで本研究では，公立の保育施設（幼稚園および保育所）を対象に，1 年間の交流活動の回数や時期，場所，内容などの実施状況と園側の意図，園側が感じている問題点を調べた。これらの結果をもとに，幼児と小学生の交流を意義あるものにする上での課題を整理する。

II 方法

1. 対象

X 県内の公立の幼稚園および保育所 189 ヶ所を対象とした。回答済の質問紙は 136 部を回収した（回収率 72%）。

2. 手続き

2015 年 1 月から 3 月にかけて，自記式・無記名式の質問紙調査を行った。対象園には依頼状と質問紙 1 部，切手付の返信用封筒を送付した。

3. 調査項目

質問紙は，小学生との交流活動の有無と回数，理由を問う 3 項目，交流活動の内容を問う 1 項目，小学生との交流における課題を問う 1 項目，2014 年度の交流活動の詳細（月別の交流活動の内容，交流した幼児の年齢と小学生の学年，場所，ねらい）を問う 60 項目の計 65 項目で構成された。

4. 倫理的配慮

対象園が調査に協力する前に研究の内容を把握できるように，依頼状には研究の目的や内容，園や個人の情報への配慮について記した。加えて依頼状には，質問紙への回答をもって調査協力の承諾を得たものとするを記した。回収した質問紙は鍵のかかる部屋で保管し，調査者以外の目に触れることのないよう配慮した。また，データの集計にあたっては園名や個人名が特定されることのないよう留意した。

III 結果と考察

1. 幼児と小学生の交流の実施状況

2014年度における小学生との交流の有無について、交流した園は全体の89%（136か所中121か所）であった。交流しなかったと答えた15園にその理由を尋ねたところ、主な理由として挙げたのは、「小学校が遠い」（4か所）、「小学校側からの申し込みがなかった」（3か所）、「日程の調整がつかなかった」（2か所）であった。この他に、校下に多くの幼稚園や保育所があるために、交流の順番が回ってくるのに時間がかかるケースや、3歳以上の子どもが在籍していない状況であるために小学生との交流は難しいと感じているケースなどがあった。

2014年度に交流を行ったと答えた園（121か所）に対して、この年度における交流回数を自由記述式で尋ねた。その結果、5回以内が87%（121か所中105か所）と多く、6～10回が10%（12か所）、11回以上が2%（2か所）であった（残りの2か所は無回答）。また、交流回数が5回以内であった105か所を回数ごとに分けると、1回が17%（121か所中21か所）、2回が28%（34か所）、3回が19%（23か所）、4回が13%（16か所）、5回が7%（9か所）であった（105か所中2か所は“2～3回”などと記述していた）。年に2回もしくは3回の交流を行うケースが半数近くを占めるものの、4回以上の交流をもつケースが3割強あることがわかる。

交流活動の内容について選択式で尋ねたところ、「小学生が企画したゲーム等を一緒に行く」が80%（121か所中97か所）、「小学校内を小学生に案内してもらおう」が60%（75か所）、「小学生の歌や踊りを見る」が35%（42か所）であった（表1）。小学生が主導して交流を行うケースが大半であり、幼児の活動を小学生が見学するなどのケースは少なかった。

庄司・野田（2009）の調査によると、子ども同士の交流が小学生にもたらす成果について、小学校の教員は「小さい子どもへの思いやりの心が育つ」「園児のお世話を通して年齢相応の自覚や自分の成長を実感できる」といったことを挙げている。また、交流は行事の機会の他に、生活科や総合的な学習といった授業の時間を活用して行われていた。このことから小学校においては、文部科学省・厚生労働省（2009）が示すように「小学生が幼児に伝わるような言葉使いやかかわりを工夫したり、思いやりの心を育んだり、自分の成長に気づいたりする」ことをねらい、授業の一貫として幼児との交流活動を位置

表1. 小学生との交流活動の内容（n=121）

小学生が企画したゲーム等を一緒に行く	80%（97か所）
小学校内を小学生に案内してもらおう	60%（72か所）
小学生の歌や踊りを見る	35%（42か所）
保育者や教諭が企画したゲーム等を一緒に行く	31%（38か所）
小学生と一緒に芋ほり等の作業をする	29%（35か所）
小学生に歌や踊りを披露する	14%（17か所）
その他	27%（33か所）

づけ、実施しているケースがあると考えられる。つまり、小学校の授業の一環として行われるために、小学生が幼児のために遊びを企画したり、幼児に自分たちの学習の成果を見せることで自らの成長を実感したりするような活動が多くあるのであろう。ただしこの場合、園側は、小学校が作成した授業計画に基づき、その内容に合わせながら、交流が幼児にとっても意味あるものになるように努めることが求められることになる。

小学生との交流において、どのような問題を感じているかを選択式で尋ねた。「特に問題はない」と答えた園は34%（121か所中41か所）であった。問題があると答えた80園からは、小学校との打ち合わせの機会がないこと（51%）や、時間や人手が足りないこと（26%）、交流のねらいを達成できる活動が実現していないこと（20%）などが挙げられた（表2）。また、表2のその他に含まれた回答には「小学校側の企画に参加している状態にあり、園側の思いを活動に反映できていない」（6か所）、「事後の振り返りの時間を小学校側ともつことができていない」（3か所）、「小学校との距離が離れている」（2か所）などがあった。

表1に示したように、交流の多くは小学校側が作成した計画に基づいて行われていると推察される。

表2. 小学生との交流における問題点（n=80）

小学校との打ち合わせの機会がない	51%（41か所）
交流の準備に時間や人手を割けない	26%（21か所）
交流のねらいを達成できる活動が実現していない	20%（16か所）
交流を見守る職員の人数が足りない	14%（11か所）
その他	31%（25か所）

（%の母数は、問題点を挙げた80園である）

その中で、小学生だけでなく幼児にとっても意義のあるものにしていくためには、事前の打ち合わせや事後の振り返りの時間を持ち、保育者と教員が十分な意思疎通を図っていかなくてはならない。しかし、これらの時間をもつことができているということが多く挙げられた。庄司・野田（2009）の調査より、小学校教員も「互いがメリットのある指導計画の作成」、「打ち合わせのための時間の確保」、「担当教師の負担にならない活動計画」などを課題に挙げている。人手不足や互いの業務の忙しさ、日程調整の難しさが、打ち合わせや振り返りの時間の確保を困難にしていることがうかがえる。このことは、交流のねらいを達成できる活動ができていないと保育者が感じることにもつながっていると推察される。したがって、子ども同士の交流を幼小接続において意義のある活動にしていく上で、双方の職員の意思疎通をどのように図っていくかは、大きな課題の一つであると言える。

2. 月別にみる交流内容の特徴

月別に、どのような交流が行われているかを自由記述式で尋ねたところ、交流を行ったと回答した121か所中119か所より回答を得た。月ごとに交流を行った園数を集計したところ、7月、9月から11月、2月などに交流を行うケースが多く、年度の始めと終わりの月である4月や3月には交流がほとんど行われていなかった（図1）。また、月ごとの交流の内容や交流を行った子どもの学年、交流を行った場所を表3にまとめた。表3において交流の内容を記すにあたり、行事等の機会を利用していた場合はその行事名を記した。また、交流を内容とする活動が

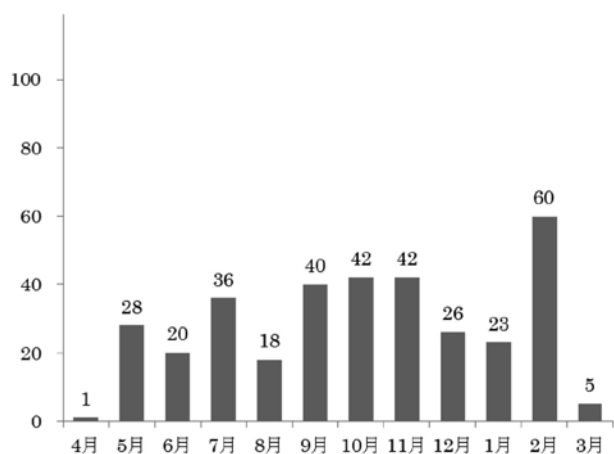


図1. 各月に交流を行った園数 (n=119)

単独で行われていた場合は「交流会」と記すことにした。なお、4月に行われた交流は1園における1件のみであったため表3には示さなかったが、この1件とは「交通安全教室の合同実施」であった。

表3より、5月は主に、小学校の運動会に幼児が参加するという形で交流が行われていた。小学校に出向くため、3, 4, 5歳クラスのすべての子ども（以下、全園児）が参加するケースは少なく、5歳クラスの子ども（以下、5歳児）のみが運動会に参加していた。また、畑の苗植えの時期であることから、この苗植えを小学生とともにしている園があった。5月に、交流会を行っていたのは3園と少なかった。活動に参加した子どもは、5歳児と小学4年生や5年生、全園児と2年生という組み合わせであった。これらの活動はいずれも幼稚園や保育所で行われていた。

6月や7月には、5月と比べて交流会を行う園が増えた（6月は10件、7月は12件）。これらの活動は幼稚園や保育所で行われるケースが多く、園側からは5歳児や4歳児、あるいは全園児が参加していた。交流相手の小学生の学年は1年、2年、5年、6年のいずれか、もしくは複数であった。なお、7月には交流会の他に、小学生を招いての夏祭りや、小学1年生を招いての同窓会、カレーパーティーなどが行われていた。

8月は、幼稚園や小学校が夏季休業に入るため、交流の件数は減少した。ただし、この夏休みの期間を利用して、卒園児である小学1年生を招き、同窓会を開いている園があった。加えて、地域の夏祭りなどに、小学生とともに参加しているケースがあった。

9月や10月に入ると、幼稚園や保育所等では運動会が行われる。この運動会において小学生と交流を行ったと答えたのは、9月が24園、10月が5園であった。一方、交流会を行った園は、9月が2園、10月が15園であった。秋期に行われる運動会は、園が主催するものが多い。特に9月には、園の職員は運動会の準備等に追われることとなる。交流会が9月にほとんど行われていない背景には、このような事情があるものと推察される。なお、9月や10月に行われた交流会の参加児をみると、園側からは5歳児が参加するケースが多かったが、3歳児と6年生といった組み合わせもあった。

11月は交流会を行った園が16園と多かった。こ

表 3. 月別の交流の内容, 対象児, 場所 (括弧内は園数)

月	内 容	対象児 (幼児と小学生)	場 所
5	運動会 (15)	5 歳児と全校児 (12) 全園児と全校児 (3)	小学校 (15)
	苗植え (6)	5 歳児 (3) と低学年児 (1), 高学年児 (1) 全園児 (3) と全校児 (2), 低学年児 (1)	小学校 (5) 園 (1)
	交流会 (3)	5 歳児と高学年児 (2) 全園児と低学年児 (1)	園 (3)
	その他 (避難訓練, クリーン作戦等)		
6	交流会 (10)	5 歳児 (5) と高学年児 (4), 低学年児 (2) 4 歳児と高学年児 (1) 3 歳以上の複数クラスの子ども (4) と高学年児 (3), 低学年児 (1)	園 (9) 小学校 (1)
	その他 (避難訓練, 学校コンサートの見学, 散歩で小学校へ行き校庭で遊び授業を見学, サッカー巡回指導など)		
7	交流会 (12)	5 歳児 (6) と高学年児 (5), 低学年児 (1) ※2 ケースは 4 歳児含む 全園児 (6) と低学年児 (4), 高学年児 (1)	園 (11) 小学校 (2)
	夏祭り (6)	全園児 (6) と低学年児 (4), 全校児 (2)	園 (6)
	同窓会 (5)	5 歳 (1), 4, 5 歳 (1), 全園児 (3) と 1 年生 (5)	園 (5)
	カレーパーティー (4)	5 歳 (1), 4, 5 歳 (1), 全園児 (2) と 1 年生 (4)	園 (4)
	その他 (七夕の集い, 一緒に運動しよう会, あさがおの叩き染めの合同学習, 音読の鑑賞など)		
8	同窓会・1 年招待会 (7)	5 歳児 (1), 全園児 (6) と 1 年生 (7)	園 (7)
	夏祭り (5)	5 歳児と低学年児 (1) 全園児 (4) と全校児 (2), 低学年児 (1)	場所は様々
	その他 (わんぱく広場, 盆踊り練習会, ボランティア活動など)		
9	運動会 (24)	5 歳児 (9) と高学年児 (4), 低学年児 (3) 全園児 (13) と全校児 (6), 低学年児 (3), 高学年児 (2)	園 (13) 小学校 (12)
	交流会 (2)	4, 5 歳児と 2 年生 (1) 3 歳児と 6 年生 (1)	園 (2)
	その他 (避難訓練, 稲刈り, 学校訪問など)		
10	交流会 (15)	5 歳児 (12) と高学年児 (7), 低学年児 (5) ※1 ケースは 4 歳児含む 3 歳児 (2) と高学年児 (1), 低学年児 (1) 全園児 (2) と高学年児 (2)	園 (14) 小学校 (3)
	運動会 (5)	5 歳児 (2) と低学年児 (2) 全園児 (3) と全校児 (1), 低学年 (2)	園 (5) 小学校 (1)
	芋ほり (4)	5 歳児 (2) と低学年児 (1), 高学年児 (1) 全園児 (2) と全校児 (1)	小学校 (3) ※畑
	就学時健診 (4)	5 歳児 (4) と高学年児 (3), 低学年児 (1)	小学校 (4)
	その他	学習発表会, 音楽会の鑑賞, 公民館祭りへの参加, もちつき大会など	
11	交流会 (16)	5 歳児 (14) と低学年児 (8), 高学年児 (6) ※2 ケースは 4 歳児含む 全園児 (2) と高学年児 (2)	園 (9) 小学校 (8)
	秋祭り (7)	5 歳児 (6) と低学年児 (6) ※1 ケースは 4 歳児含む 全園児と全校児 (1)	小学校 (7)
	収穫祭 (2)	5 歳児 (2) と全校児 (1)	小学校 (1)
	その他 (もちつき, お茶会, 避難訓練, 地区文化祭, 就学時健診に向けた学校見学など)		
12	交流会 (13)	5 歳児 (13) と低学年児 (8), 高学年児 (5) ※3 ケースは 4 歳児含む	小学校 (8) 園 (5)
	クリスマス会 (4)	4 歳児 (2) と高学年児 (2) 全園児と全校児 (1)	その他 (3)
	その他 (もちつき会, 生活発表会, ミニ運動会など)		

1	交流会 (6)	5歳児 (4) と低学年児 (4) 全園児と低学年児 (1)	小学校 (5)
	体験入学 (5)	5歳児 (5) と低学年児 (4), 高学年児 (1)	小学校 (5)
	給食体験 (4)	5歳児 (4) と低学年児 (4)	小学校 (4)
	その他 (もちつき, 新年お楽しみ会, 伝統唄の練習会など)		
2	交流会 (30)	5歳児 (26) と低学年児 (22), 高学年児 (2) 全園児 (4) と低学年児 (2), 高学年児 (2)	小学校 (27) 園 (4)
	体験入学 (14)	5歳児 (12) と低学年児 (12), 高学年児 (4)	小学校 (14)
	学校・授業の見学 (10)	5歳児 (10) と低学年児 (7), 全校児 (2)	小学校 (10)
3	交流会 (2)	5歳児 (2) と低学年児 (1), 高学年児 (1)	小学校 (2)
	学校体験・学校探検 (2)	4, 5歳児と低学年児 (1) 3, 4歳児と低学年児 (1)	小学校 (2)

※3, 4, 5歳クラスの子どもがすべて参加している場合は「全園児」と表現している。

※小学1～3年生を「低学年児」, 4～6年生を「高学年児」, 全学年の子どもを「全校児」と表現している。

※無回答の件数は, 表中には示していない。

表4. 交流会における園側のねらい

実施月	小学生とふれ合う 楽しさを知る	就学後に向けて 個々の関係を作る	小学校生活への イメージをもつ	学習成果披露に よる達成感・自信	各行の%の母数 (実践園の数)
6月	100% (10園)	70% (7園)	50% (5園)	0	10園
7月	75% (9園)	50% (6園)	42% (5園)	0	12園
10月	93% (14園)	40% (6園)	47% (7園)	20% (3園)	15園
11月	69% (11園)	44% (7園)	56% (9園)	50% (8園)	16園
12月	77% (10園)	46% (6園)	38% (5園)	38% (5園)	13園
2月	67% (20園)	63% (19園)	93% (28園)	83% (25園)	30園

※実施園が10に満たなかった月の結果は, 表に示していない。

の活動に参加する幼児の多くは5歳児であり, 交流の相手は小学1年生が最も多く, 5年生が次いだ。また, こうした活動は10月以前には園で行われるケースが大半であったが, 11月は小学校で行うケースが増えた。加えて, 小学校で小学生が企画する「秋祭り」に幼児が招かれるケースがあった。

12月以降には, 交流会の多くが, 小学校で行われていた。交流の対象は, 就学を控えた5歳児と小学1年生であるケースが多かった。また, 1月や2月に入ると体験入学という形で, 一日もしくは半日, 5歳児が小学校で過ごす活動が行われる。この中で, 小学生に校内を案内してもらったり, 小学生の授業を見学したり, 給食を一緒に食べたり, 共に遊んだりするような交流がもたれていた。

3. 交流会における園側のねらい

交流会において, 園側はどのようなねらいを持っていたのかを選択式で尋ねた。月ごとの集計結果を表4に示した。表4に示したすべての月において「小

学生とふれ合う楽しさを知る」と答えた園が多かった。活動の中には, 鬼ごっこやかくれんぼなどのゲームや, ごっこ遊び, ぬり絵, 折り紙といった遊びが含まれていることが多い。

また, 2月には「小学校生活へのイメージをもつ」ことや「学習成果を披露することによる達成感や自信をもつ」ことを挙げた園が多かった。2月は, 5歳児と小学1年生の交流が多くもたれる時期であり, 就学を控えた幼児が, 小学1年生になった時の自分を想像したり, 小学生になりたい気持ちを高めたりすることがねらわれていることがうかがえる。また, 2月の交流は, 小学校で行われるケースが多いことから, 小学校という場所についてのイメージをもつことも期待されていると推察される。

ただし, 2月よりも前の活動において, 小学校生活へのイメージをもつことをねらっていた園はそれほど多いとは言えない。また, 7月までの活動においては, 幼児が学習した成果を披露することにより達成感や自信をもつことをねらいにしている園はな

かった。7月までの活動は主に園で行われていることからみても、安心できる場所において、まずは幼児が小学生とのふれ合いに慣れることが重視されていると考えられる。

IV. 課題の整理

文部科学省・厚生労働省（2009）は、「幼児が小学校生活に親しみ期待を寄せたり、自分の近い将来を見通すことができるようになる」ためには、継続的な交流を行い、交流が深まるようにする必要があるとしている。継続的な交流とは、幼稚園や保育所などに通う子どもが卒園するまでの間に、小学生と複数回の交流をもつことを指すと考えられる。また、1年に1回という頻度では、交流の深まりは期待できないのであり、少なくとも卒園前の1年間には複数回の交流をもつことが求められていると言える。本調査より、継続的で深まりのある交流を実現する上で、交流回数の確保、交流方法の工夫、長期的な視点をもった交流のあり方の検討、職員間の意思疎通や連携といった課題があることが確認された。

1. 交流回数の確保と交流方法の工夫

交流回数については、小学生との交流を行えなかった園が全体の11%、交流回数が1回のみであった園が17%あった。これらの園の中には、小学校が遠く、行き来が難しい、校下に多くの幼稚園や保育所があるために交流の順番待ちをしなくてはならない、3歳以上児が在籍していない状況にあるなど、やむを得ない事情を抱えているところがあった。

一方、4回以上の交流を持った園では、交流会だけでなく、運動会や避難訓練、就学時健診、体験入学といった園内（学内）行事、食物の苗植えや収穫のような活動、町内の祭りやボランティア活動などの園外（学外）行事を利用していった。このように、内外のさまざまな機会を活用することで、定期的な交流をもちやすくなる。

これらのことをふまえると、交流方法の工夫は、交流回数の問題を解消する上でも有効であろう。園や学校において子ども同士が直接ふれ合う形での交流だけでなく、園や学校外での活動の機会を利用することや、間接的な交流をもつことも含めて、交流のあり方を考えていく必要がある。

2. 長期的な視点をもった交流のあり方の検討

交流を行う幼児は5歳児であるケースが、年間を通して多かった。また、5歳児は年度の前半には主に園で、年度の後半には主に小学校において、小学生との交流をもっていた。このことから、年度の前半には、幼稚園や保育所という幼児にとって安心できる場で小学生と交流し、小学生と打ち解けることや、小学生に親しみをもつことが活動のねらいとなっていると考えられる。また、年度の後半には、小学校内の様子や、そこで生活する小学生の姿を見ることで、小学校生活に親しみ期待を寄せることが活動のねらいになっていると推察される。

一方、3歳クラス、あるいは4歳クラスの子どもが小学生と交流するケースは少なかった。これらのクラスの子どもは就学までに期間があること、園生活に慣れることに重きがおかれることが、その理由として考えられる。ただし、3歳児や4歳児にとっても、小学生との交流は、「自分の園にいるお兄さん、お姉さんよりもっと大きなお兄さん、お姉さんがいる」ということを認識する機会となる。これは、漠然とではあっても、自分の近い将来を見通すことにつながると考えられる。このように、子どもに無理をさせない範囲で、長期的な視点をもって交流のあり方を検討することは、幼小接続において意義のある交流を実現する上で必要であろう。ただし、この点については継続的な交流の意義や効果の検証の結果をふまえて検討を進めるべきである。

3. 職員間の意思疎通や連携

職員間の意思疎通や連携をどう図っていくかは、大きな課題の一つである。保育者の多くは、小学校教員と事前の打ち合わせや事後の振り返りを行うことができていると感じていた。この背景には、保育者と教員の双方が多忙であることや、互いの日程調整が難しいことがあると考えられる。文部科学省初等中等教育局（2017）が行った教員勤務実態調査によれば、小学校教諭の場合、一日の学内勤務時間が2006年度には10時間32分であったのに対して、2016年度は11時間15分と長くなっている。また、1週間あたりの勤務時間は2016年度において57時間25分となっており、教員が毎日長時間の勤務をこなしていることがうかがえる。そのため、職員同士の話し合いの時間を増やすことを解決策として挙げることは適当とは言えない。今後は、職員間の打

ち合わせや振り返りを効率的に、かつ充実して行えるための方策を模索していくべきであると考え。

文献

松崎洋子・無藤隆・齋藤久美子・佐久間路子・長谷川真理・福田きよみ・堀田正央・師岡章（2008）平成19年度児童関連サービス調査研究事業報告書 保育所と小学校の連携のあり方に関する調査研究，財団法人こども未来財団。

文部科学省・厚生労働省（2009）保育所や幼稚園等と小学校における連携事例集，文部科学省，<http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/youchien/__icsFiles/afiedfile/2009/03/19/1258039_1.pdf>，（最終閲覧日：2018年5月4日）。

文部科学省初等中等教育局（2017）教員勤務実態調査（平成28年度）の集計（速報値）について，文部科学省，<www.mext.go.jp/b_menu/houdou/.../1385174_002.pdf>，（最終閲覧日：2018年5月15日）。

文部科学省初等中等教育局幼児教育課（2017）平成26年度幼児教育実態調査，文部科学省，<http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/__icsFiles/afiedfile/2018/01/17/1278591_05.pdf>，（最終閲覧日：2018年5月4日）。

社会福祉法人日本保育協会（2010）第1章 保小の連携・総論，保小の連携実践事例集－なめらかに育ちをつなぐ保育の工夫－，社会福祉法人日本保育協会事業部，2-9。

庄司裕志・野田敦敬（2009）幼小連携の取り組みについての一考察，愛知教育大学教育実践総合センター紀要，12，221-228。

上野ひろ美（2007）保幼小連携の課題に関する考察，奈良教育大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要，16，109-122。

幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議（2010）幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について（報告），文部科学省，<http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afiedfile/2011/11/22/1298955_1_1.pdf>，（最終閲覧日：2018年5月4日）。

（2018年5月18日受付）

（2018年7月19日受理）